

「ある朝、オペラを振り返ったとき・・・」

みなさんは、オペラのメロディを口ずさむことはありますか。

モーツァルトの時代、《フィガロの結婚》がプラハで大成功を収め、町中みんなが「フィガロ」を口ずさみ、あるいは奏でていたという。また、ヴェルディの《リゴレット》の〈女心の歌〉については、初演の日にはすでにヴェルディの家の軒下で歌うものがあった、というエピソードが残されている。この手の話は枚挙に遑がない。

それは、今で言うポップ・ソングやミュージカルに近いのかもしれない。人は、娯楽として気軽にオペラ劇場に足を運んでいたのだろう。

しかるに、20 世紀のオペラ、特にプッチーニやリヒャルト・シュトラウス以降のオペラには、どうにも口ずさめるものがないなあ、という気がするのです。また日本のオペラにも、そういう親しみやすいメロディがあまりない（し、それよりも、「知らざあ言って聞かせあしょう」などど、歌舞伎の名ゼリフを捻っていたほうがずっと洒落ていたりする）。

ところでオペラは、何か高尚で近寄りがたいもの、という印象を持たれることが多い。でも、オペラが最も華やかだった 19 世紀後半は、その時代を反映する題材が取り上げられることが多かった。《カルメン》も、スペインでの実話に基づくものであったし、《椿姫》や《ボエーム》も、ほぼ同時代を扱っている。神話や民話ばかりがオペラの専売特許ではないのだ。

そうすると、たとえば 20 世紀のオペラの名作は、というと、もしかしたら、《ポーギーとベス》（ガーシュウィン）とか《ウェスト・サイド・ストーリー》（バーンスタイン）とか《オペラ座の怪人》（ロイド＝ウェッバー）であるのかもしれないなあ、などとも考えてみる。

このようにオペラについてあれやこれやと思案していたところ、演出の松本先生の勧めでオペラを書くことになった。

高木さんが面白い話を書いてくれた。メロディに載せやすい素敵な歌詞だ。

鹿児島のみんなも、公演に向けてがんばってくれている。

「ある朝、人生を振り返ったとき・・・」と、みんなで口ずさめるオペラが出来上がりました。

《ミスター・シンデレラ》作曲着手よりちょうど 13 ヶ月の日に （初演プログラム／伊藤康英）